

東京有明医療大学附属鍼灸センターの現状と課題

坂井友実 古賀義久 安野富美子
 木村友昭 水出靖 矢鴫裕義
 菅原正秋 高山美歩 高梨知揚
 谷口博志 藤本英樹 Oyunchimeg Chuluunbat

I. はじめに

東京有明医療大学附属鍼灸センター（以下、鍼灸センター）は2011年1月11日に開設した。鍼灸センターの役割は大きく3つあると考える。第1は地域医療としての役割である。地域住民の疾病・症状の改善、健康の保持増進に貢献することである。第2は臨床教育としての役割である。学生の臨床実習、並びに鍼灸師免許取得後の卒後研修の場としての役割である。第3は臨床研究の場であり、鍼灸治療の有効性を科学的根拠に基づいて明らかにすることである。

東京有明医療大学は開学から10年の節目を迎えるが、鍼灸センターは開学当初から準備を進め、2018年1月で8年目に入った。そこで、前述した3つの役割の観点から、鍼灸センターのこれまでの成果、および現状と今後の課題について述べる。

II. 鍼灸センター年表と概要

1. 鍼灸センター年表

表1に鍼灸センターの開設以来の年表を記す。

2. 鍼灸センター概要

鍼灸センターでの診療には、教員、非常勤鍼灸師、研修生、研究生、大学院生、学生が従事している。毎日、2～3名の教員を鍼灸センターに配置し、教員を中心とした診療グループを設けた。表2は平成30年度の診療グループごとの配置を示す。

鍼灸センターの診療ブース（区画）は13（うち1つは特別ブース）で稼働している。

診療時間は月～金の午前9時から午後5時である。

表1 附属鍼灸センター年表

2011年1月	江東区保健所へ届け出、認可 東京有明医療大学附属鍼灸センター開設
2011年10月～現在	ATコース現場実習Ⅰ（見学実習1回／年） *2009年・10年は開設前のセンターで実施。
2011年8月～現在	船橋市立看護専門学校見学実習（1回／年）
2012年4月	鍼灸学科第1期生（4年次）「附属鍼灸センター実習」開始 第1期鍼灸センター研修生受け入れ
2012年～2016年	ひらめきときめきサイエンス 見学実習（1回／年）
2014年4月～現在	中高生対象にはり・きゅう治療体験を設置
2014年10月～現在	大学祭での鍼灸体験コーナーを設ける（1回／年）
2017年6月	NHK BSプレミアム「美と若さの新常識－カラダのヒミツ－」 第7回「漢方で無理なくスリム&ビューティー」に撮影協力、出演
2017年11月	日本統合医療学会学術集会、鍼灸体験コーナー
2018年2月	モンゴル国立医療科学大学鍼灸学科教職員、学生、見学実習
2018年9月	NHK総合 特別番組「東洋医学ホントのチカラ～科学で迫る鍼灸・漢方・ヨガ～」に撮影協力、出演
2019年1月	第1回研修生症例報告会

表2 診療グループ 平成30年度

		月	火	水	木	金							
午前	教員 (非常勤鍼灸師)	高梨 (吉田)	谷口	水出	矢嵩	坂井	高山	オウチダグ	古賀	安野	菅原	木村	藤本
	研修生	矢野 久保寺 山田 浅岡 荒木	埴本 井坂	佐久間 山本	喜多村 平松 内田 佐藤	沼田 浅岡 奥野	神谷 荒木		山田 山本	芳賀 奥野	田中 高木 山内 内田	喜多村 近藤 埴本	南雲 立花 神谷 井坂
	研究生				奈須		奈須			山崎			
	大学院生				納部	柴田 小林				柴田		立川	村越
	学生	井上 榎本 佐藤 矢野	磯崎 小田木 西村	白旗 松本 山下 山崎	田中 韓 安井	大野 大淵 羽根田	小野寺 関本 中村		後藤 高関	奥村 清水 柳澤	小野塚 竹谷 御子神	辻 南 荒井	一瀬 粕加屋 小泉 菅田
午後	教員 (非常勤鍼灸師)	高梨	谷口	水出 (小瀬)	木村	坂井	藤本	オウチダグ	古賀	安野	菅原	菅原	藤本
	研修生	吉田 矢野 久保寺 山田 浅岡 荒木	埴本 井坂	佐久間 内田 山本	喜多村 平松 佐藤	沼田 浅岡 奥野	神谷 荒木		山田 山本	芳賀 奥野	田中 高木 山内 内田	喜多村 埴本	南雲 立花 神谷 近藤 井坂
	研究生			山崎						山崎			
	大学院生				立川	柴田 小林				柴田			村越

※月曜～金曜日の午前は鍼灸学科4年生の実習を実施

表3 開設後の来院患者数の推移

	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	計
初診	251	209	230	257	230	213	244	295	1,929
再診	1,507	2,253	3,015	3,584	3,751	3,684	4,169	3,867	25,830
のべ患者	1,758	2,462	3,245	3,841	3,981	3,897	4,413	4,162	27,759
累計	1,758	4,220	7,465	11,306	15,287	19,184	23,597	27,759	27,759
稼働日数	224	237	232	231	232	224	228	193	1,801

注) 2018年は10月までを示す

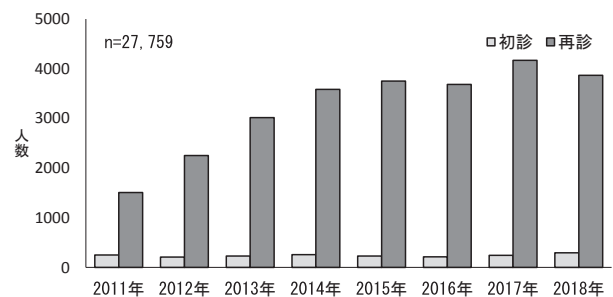
Ⅲ. 地域医療としての役割

以下に、2011年1月から2018年10月までの来院患者状況について示す。

1. 初診患者数および累計患者数

集計対象期間における施術日数は1,081日(月間平均19.2日)、初診患者数は計1,929名(月間平均20.5名)、累計患者数は27,759名(月間平均295.3名)であった。

年次推移についてみると、開設した2011年の年間患者総数は1,758名(初診患者251名、再診患者数1,507名)であり、以後増加傾向を示している。2018年は10月末時点



注) 2018年は10月までを示す

図1 開設後の患者数の推移

における患者総数は4,162名（初診患者295名，再診患者3,867名）であり，年間の合計では前年の患者総数（2017年12月末で4,413名）を上回ることが予測される（図1，表3）。

2. 患者構成

(1) 性別・年齢別内訳

初診患者の性別内訳は男性688名，女性1,241名であり，女性は男性の約1.8倍であった。年齢は1歳～91歳までである，年代別の分布状況についてみると，40歳代（23%）と30歳代（21%）が多く，両年代を合わせると全体の44%を占めていた（図2）。

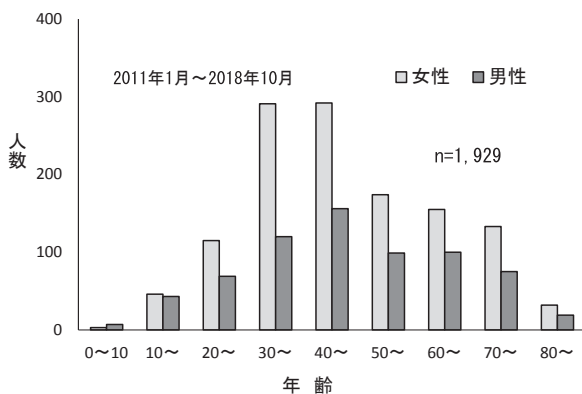


図2 初診患者の性別年齢別内訳

(2) 居住地域別

初診患者を居住地域別にみると，江東区内が全来院患者の約66%を占め，江東区以外の東京都内（20%），千葉県（5%），神奈川県（4%），埼玉県（3%）がそれに続いていた。江東区内の居住地域をさらに詳細にみると，その多くは有明地区，東雲地区といった徒歩で来院可能なエリアに居住しており全体の44%を占めていた（図3）。

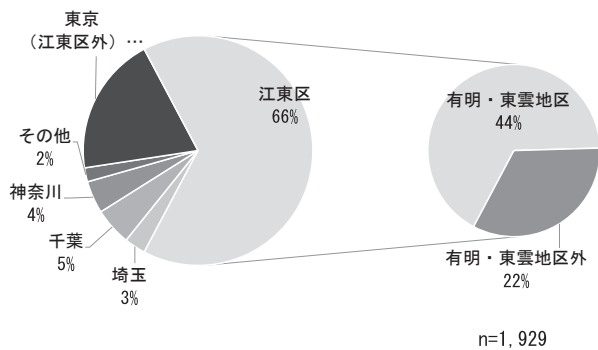


図3 初診患者の居住地別内訳

(3) 社会背景

初診患者のプロフィールの内訳は，パート勤務を含む有職者（54%）が最も多く，専業主婦（19%），学生（10%），無職（9%）がこれに続いていた（図4）。

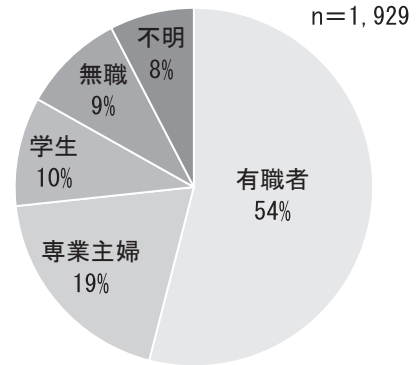


図4 初診患者の社会的背景

(4) 情報源

来院のきっかけとなった情報源は，知人や家族からの紹介（58%）が最も多く，他には鍼灸センター窓に設置した看板（13%），インターネット（12%）等が多かった（図5）。

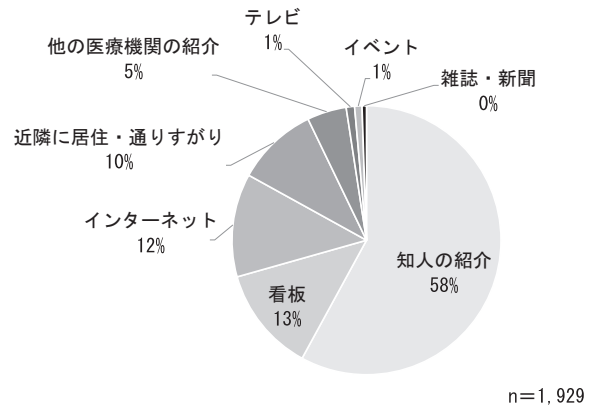


図5 来院のきっかけとなった情報源

(5) 鍼灸経験の有無

鍼灸センターの初診時までに鍼灸の受療経験を有していたのは，はり治療（52%），灸治療（30%）の患者であった。

3. 来院患者の主訴

初診患者の主訴を第3位まで合計すると2,848件であっ

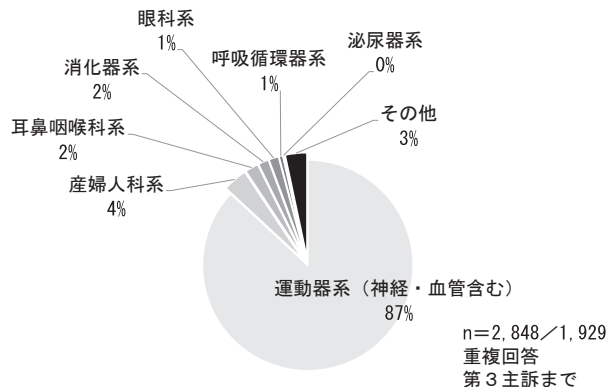


図6 初診患者の主訴の系統別内訳

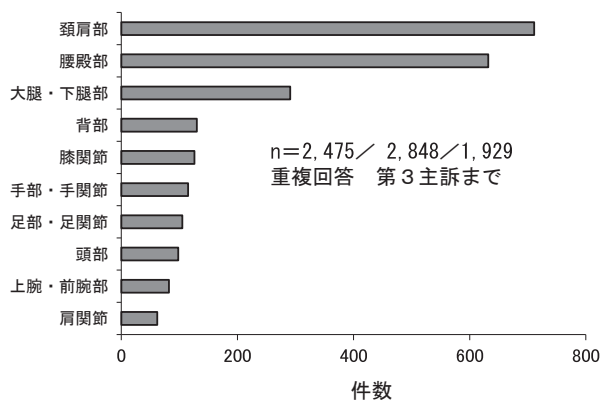


図7 運動器系主訴の部位別内訳 (上位10位まで)

た。このうち運動器系の主訴が2,475件 (87%) で最も多かった (図6, 7)。その他、産婦人科系 (4%), 耳鼻咽喉科系、消化器系 (各2%) であった。

IV. 教育の場としての役割

1. 鍼灸学科臨床実習

2012年4月から4年次の学生を対象に鍼灸センターでの実習 (科目名「附属鍼灸センター実習Ⅰ及びⅡ」) が開始された。「鍼灸センター実習Ⅰ」(4年前期) では主として、教員による診察の見学や診察補助を通して、医療面接や身体診察による病態の推定、病態に基づく治療プラン、患者へのインフォームドコンセント、鍼灸治療およびその効果の評価等の実際を学ぶ。「鍼灸センター実習Ⅱ」(4年後期) では、医療面接、身体診察を実際に行い、病態の推定、鍼灸治療の適否の判断、病態に基づく治療プランの作成、鍼灸治療、評価等を教員の指導の下に学ぶ。以下に鍼灸センター実習ⅠとⅡの到達目標を記す。

(1) 鍼灸センター実習Ⅰの到達目標

- ①鍼灸診療の流れが分かるようになる。

- ②教員の行っている診察 (評価含む)・治療の意義が分かるようになる。
- ③患者への適切な接遇が行えるようになる。
- ④教員の診療の補助が行えるようになる。
- ⑤守秘義務を果たし、プライバシーへの配慮ができるようになる。
- ⑥患者の予診を行うことができるようになる。
- ⑦適切な衛生操作が行えるようになる (手指消毒、清潔操作、治療用具の衛生管理、廃棄物処理)。

(2) 鍼灸センター実習Ⅱの到達目標

- ①実習Ⅰの事項
- ②診察によって病態を把握し、鍼灸治療の適応・不適応の判断ができるようになる。
- ③患者の病態に応じた適切な治療プランを作成できるようになる。
- ④適切な鍼灸治療が行えるようになる (安全性・正確性)。
- ⑤治療効果を適切に評価できるようになる。
- ⑥治療効果の評価をもとに次の治療プランを作成できるようになる。
- ⑦正確に診療の内容を記録できるようになる。

上記の到達目標を達成するために「附属鍼灸センター実習のてびき」並びに学生自身が記録する「臨床実習日誌」を配布し、指導に当たった。また、実習で担当した症例をまとめ、毎年12月に「カンファレンス (症例報告会)」を実施している。

2. 研修生制度

(1) 概要

鍼灸師免許取得後の卒後研修の場として、研修生制度が設けられた。この制度は優れた臨床能力を有する鍼灸師を養成することを目的として2012年に第1期生を受け入れた。鍼灸センターにおける診療の実際を学ぶとともに、各種の疾患や症状を東西両医学的視点からとらえ、対応できる臨床能力を習得することを目標としている。

募集の対象者は当該年度に鍼灸師の免許取得見込の者または既取得者とし、本学HPに掲載するとともに首都圏の専門学校に募集要項を送付している。研修生の試験は毎年3月初めに実施し、筆記試験 (小論文を含む) と面接により選抜している。研修生の研修期間は1年とし、更新が可能である。

(2) 研修生在籍状況

鍼灸センター研修制度を設けた2012年度から2018年度までの研修生の在籍状況を図8と表4に示す。研修生の全在籍者数は、開設時は9名であったが、徐々に増加し2018年では24名となった。この増加の

表4 鍼灸センター研修生年次推移内訳

	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
在籍者	9	13 (2)	11 (2)	15 (4)	18 (5)	21 (9)	24 (9)
新入生	9	7 (2)	3 (0)	7 (3)	9 (3)	8 (5)	6 (1)
継続者		6 (0)	8 (2)	8 (1)	9 (2)	13 (4)	18 (8)
修了者	3	5 (0)	3 (1)	6 (2)	5 (1)	3 (1)	

* () 内は学部卒者数 (既卒者を含む)

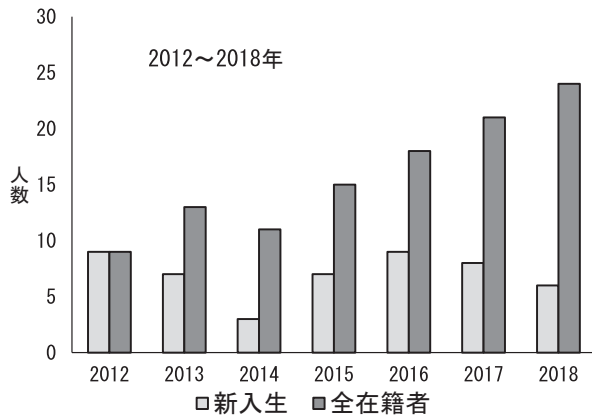


図8 鍼灸センター研修生在籍状況

要因は新入の研修生は毎年6～9名であるのに対し修了者は3～6名であり、新入の研修生が修了者より上回り、継続希望の研修生が増えたことによるものである。

なお、本学鍼灸学科学学生も卒業後の進路に鍼灸センター研修生を希望する者や卒業後、就職したが、就業の傍ら研修を希望する者もいる。また、研修を終え、本学大学院を希望する者もあり、これまで4名が進学している。

(3) 研修内容

鍼灸センターでの研修は「研修マニュアル」に基づき、下記の内容を研修する。

- ①鍼灸臨床に必要な診察と治療に関する知識と技術
診察では特に現代医学的な観点から患者の病態を的確に把握して鍼灸治療の適否を判断する能力を学ぶ。また、推定される病態に対して治療計画をたて実行するとともに、治療効果を評価する技能を身につける。
- ②鍼灸臨床の診療記録並びに臨床に関する諸文書の記載方法 (患者紹介状、依頼状、御高診願い等)
- ③症例に関する文献学習と症例カンファレンス資料の作成および発表

(4) 到達目標

- ①医療人・社会人としての資質を身につける。

②臨床技術

- ・安全な施術環境を確保、維持することができる。
- ・安全な治療を行うための技術と知識を身につける。
- ・現代医学的な病態の把握ができる。
- ・鍼灸の適応と不適応の判断ができる。
- ・臨床所見・検査データの解釈ができる。
- ・治療効果を客観的に評価できる。
- ・医療従事者としてのコミュニケーションができる。

③スキルアップ

- ・文献やインターネットなどで、疑問解決や最新の情報収集を行うことができる。
- ・担当した症例や調べた事項についてディスカッションができる。
- ・他の鍼灸師および学生をサポートすることができる。

上記の内容を基に年次毎の到達目標を下記に示す。
1年目：教員の指示の下、治療が行えるようになる。
2年目：初心患者を診察から治療まで自立して行える。症例のプレゼンができる。
3年目：専門領域を確立する。後進の指導ができる。学会発表ができる

V. 研究活動の場としての役割

附属鍼灸センターが開設した2011年から2018年6月までに報告された、附属鍼灸センター関連の研究論文は6編あり、その内訳は、原著が1編、報告が5編であった。原著の1編と報告の1編は鍼灸の安全性に関する調査研究であり、報告の3編は1症例報告、1編は鍼灸センターの概要であった。掲載誌は、海外のジャーナルが1編、本学の紀要である東京有明医療大学雑誌が5編であった。

関連学会への発表演題年次推移を図9に示す。2016年より急速に演題数が増えているが研修生の成長により、学会報告できるまでに至ったと考えられる。この期間の学会発表は25演題あり、その内訳は、附属鍼灸センターの実態報告が5演題、鍼灸の安全性に関する調査研究が1編、症例報告が19演題であった。発表先は、全日本鍼灸学会が20演題で最も多く、次いで日本東洋医学会が3演題、日本統合医療学会が1演題、江東区医師会医学会1演題であった。

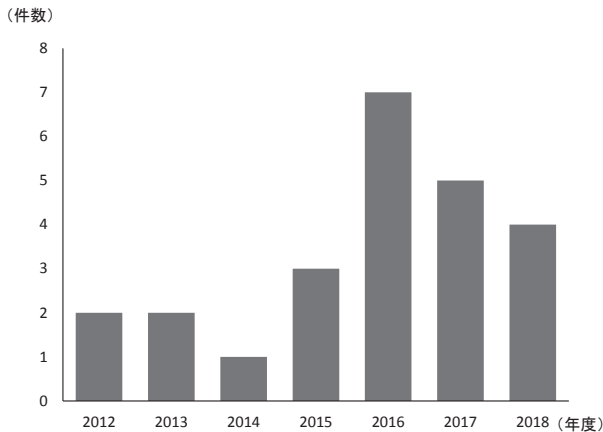


図9 附属鍼灸センター関連の学会発表件数の年次推移

尚、学会報告の5)と14)は第63回と65回の全日本鍼灸学会において、学生ポスター発表を行い、優秀賞を受賞し、その後、本学紀要に掲載されたものである(研究報告3), 4)). これらはいずれも、4年次の鍼灸センター実習で担当した症例をまとめ発表したものである。以下に、これまでの、研究論文と学会報告の一覧を示す。

研究論文

- 1) 木村友昭, 水出 靖, 菅原正秋, 古賀義久, 高梨知揚, 高山美歩, 東郷俊宏, 藤本英樹, 矢瀧裕義, 安野富美子, 坂井友実: 東京有明医療大学附属鍼灸センター報告(第1報), 東京有明医療大学雑誌, 2012; 4: p39-43.
- 2) 菅原正秋, 高梨知揚, 高山美歩, 藤本英樹, 矢瀧裕義, 木村友昭, 東郷俊宏, 水出 靖, 古賀義久, 安野富美子, 坂井友実: 東京有明医療大学附属鍼灸センターにおけるインシデントレポートの集計と考察, 東京有明医療大学雑誌, 2014; 6: p21-23.
- 3) 松浦悠人, 井畑真太郎, 古賀詳得, 古賀義久, 坂井友実: 膝痛に対する鍼治療の1症例 膝の機能評価を指標として 東京有明医療大学雑誌, 2014; 6: p25-32.
- 4) 立川 諒, 喜多村 崇, 木村友昭, 藤本英樹, 坂井友実: 進行性核上性麻痺に伴う愁訴に対する鍼治療の1症例 SF-36を指標とした検討, 東京有明医療大学雑誌, 2016; 8: p23-28.
- 5) 南雲世以子, 吉田浩子, 藤本英樹, 高梨知揚, 木村友昭, 古賀義久, 坂井友実: 自律神経失調に伴う夜間頻尿の改善がみられた鍼灸治療の1症例 経時的なSF-36の変動に着目して, 東京有明医療大学雑誌, 2017; 9: p35-41.
- 6) Nobutatsu Furuse, Hisashi Shinbara, Akihito Uehara, Masaaki Sugawara, Toshiya Yamazaki, Masayoshi Hosaka, Hitoshi Yamashita: A Multicenter

Prospective Survey of Adverse Events Associated with Acupuncture and Moxibustion in Japan. MEDICAL ACUPUNCTURE, 2017; 29 (3): p155-162.

学会報告

- 1) 木村友昭, 水出 靖, 菅原正秋, 古賀義久, 高梨知揚, 高山美歩, 東郷俊宏, 藤本英樹, 矢瀧裕義, 安野富美子, 坂井友実: 東京有明医療大学附属鍼灸センターの活動報告(第1報), 全日本鍼灸学会, 2012
- 2) 水出 靖, 木村友昭, 菅原正秋, 古賀義久, 高梨知揚, 高山美歩, 東郷俊宏, 藤本英樹, 矢瀧裕義, 安野富美子, 坂井友実: 東京有明医療大学附属鍼灸センターの活動報告, 全日本鍼灸学会, 関東支部学術集会, 2012
- 3) 高梨知揚, 安野富美子, 古賀義久, 坂井友実: 鍼灸治療後に腹部症状の増悪を訴えたCrohn病の1症例, 日本東洋医学会, 2013
- 4) 内田千加子, 藤本英樹, 菅原正秋, 古賀義久, 安野富美子, 坂井友実: FBSS(腰椎術後疼痛症候群)による下肢痺れに対する鍼治療の2症例, 全日本鍼灸学会, 2013
- 5) 松浦悠人, 井畑真太郎, 古賀詳得, 古賀義久, 坂井友実: 膝の機能評価を指標とした変形性膝関節症に対する鍼治療の1症例, 全日本鍼灸学会, 2014
- 6) 柳澤健久, 永塚顕弥, 古賀詳得, 水出 靖, 古賀義久, 坂井友実: 肩関節拘縮を認め異なる経過を示した鍼治療の2症例, 全日本鍼灸学会, 2015
- 7) 古賀詳得, 永塚顕弥, 柳澤健久, 古賀義久, 安野富美子, 坂井友実: 頸椎症関連痛型に鍼治療を行い, 頸部ROMの変化を観察した1症例, 全日本鍼灸学会, 2015
- 8) 南雲世以子, 藤本英樹, 松浦悠人, 萩本玲未, 木村友昭, 古賀義久, 越石まつ江, 坂井友実: 汎発性脱毛症に対する鍼灸治療の1症例-脱毛進行から発毛までのSF-36を指標として-, 全日本鍼灸学会, 2015
- 9) 南雲世以子, 藤本英樹, 吉田浩子, 高梨知揚, 木村友昭, 坂井友実: 自律神経失調に伴う夜間頻尿が改善した鍼灸治療の1症例, 全日本鍼灸学会関東支部学術集会, 2015
- 10) 菅原正秋, 木村友昭, 古賀義久, 高梨知揚, 高山美歩, 東郷俊宏, 藤本英樹, 水出 靖, 矢瀧裕義, 安野富美子, 坂井友実: 鍼灸の安全性に関する前向き調査-東京有明医療大学附属鍼灸センターの場合-, 全日本鍼灸学会, 2016
- 11) 南雲世以子, 吉田浩子, 藤本英樹, 高梨知揚, 木村友昭, 古賀義久, 坂井友実: 自律神経失調に伴う夜間頻尿が改善した鍼灸治療の1症例-経時的なSF-36の変動に着目して-, 全日本鍼灸学会, 2016

- 12) 古賀詳得, 松浦悠人, 永塚顕弥, 柳澤健久, 古賀義久, 坂井友実: 骨パジェット病に起因し腰部脊柱管狭窄症を呈した鍼治療の一症例, 全日本鍼灸学会, 2016
- 13) 永塚顕弥, 古賀詳得, 柳澤健久, 松浦悠人, 坂井友実: 薬剤使用過多による頭痛 (MOH) とと思われる患者の鍼治療の1症例, 全日本鍼灸学会, 2016
- 14) 立川 諒, 喜多村 崇, 木村友昭, 藤本英樹, 坂井友実: 進行性核上性麻痺に伴う愁訴に対する鍼治療の1症例-SF-36を指標とした検討-, 全日本鍼灸学会, 2016
- 15) 松浦悠人, 古賀義久, 安野富美子, 坂井友実: 長期的な経過観察を行った脊椎手術後疼痛症候群に対する鍼治療の1症例, 日本東洋医学会, 2016
- 16) 木村友昭, 高梨知揚, 藤本英樹, 菅原正秋, 高山美歩, 水出 靖, 矢瀧裕義, 古賀義久, 東郷俊宏, 安野富美子, 坂井友実, 田中滋城, 林 洋: 東京有明医療大学附属鍼灸センターの概要ならびに来所患者状況について, 江東区医師会医学会, 2016
- 17) 高木朋子, 小林絵梨子, 沼田まり子, 向 ありさ, 松浦悠人, 永塚顕弥, チュロウンバト・オユンチメグ, 古賀義久, 安野富美子, 坂井友実: 上肢の痺れと重だるさに対する鍼治療の1症例-身体診察によりTOSが疑われた症例-, 全日本鍼灸学会, 2017
- 18) 小林絵梨子, 沼田まり子, 高木朋子, 向 ありさ, 松浦悠人, 永塚顕弥, Oyunchimeg Chuluunbat, 水出 靖, 古賀義久, 安野富美子, 坂井友実: 両側性の上肢のしびれを有する患者に対する鍼治療の一症例, 全日本鍼灸学会, 2017
- 19) 沼田まり子, 小林絵梨子, 高木朋子, 向 ありさ, 松浦悠人, 永塚顕弥, Oyunchimeg Chuluunbat, 水出 靖, 古賀義久, 安野富美子, 坂井友実: 手指関節部に複数の病変を有すると考えられた鍼灸治療の1症例, 全日本鍼灸学会, 2017
- 20) 木村友昭, Chuluunbat Oyunchimeg, 高梨知揚, 藤本英樹, 菅原正秋, 高山美歩, 谷口博志, 水出靖, 矢瀧裕義, 古賀義久, 安野富美子, 坂井友実: 東京有明医療大学附属鍼灸センターの来所患者状況について, 日本統合医療学会, 2017
- 21) 向 ありさ, 松浦悠人, 藤本英樹, 古賀義久, 安野富美子, 坂井友実: 胃がん術後の消化器症状に対する鍼治療の一症例, 日本東洋医学会, 2017
- 22) 水出 靖, 木村友昭, Chuluunbat Oyunchimeg, 高梨知揚, 藤本英樹, 菅原正秋, 高山美歩, 谷口博志, 矢瀧裕義, 古賀義久, 安野富美子, 坂井友実: 東京有明医療大学附属鍼灸センターの受療患者像, 全日本鍼灸学会, 2018
- 23) 南雲世以子, 藤本英樹, 平松 耀, 木村友昭, 古賀義久, 坂井友実: 汎発性脱毛症に対する4年間の鍼灸治療における1症例報告-SF36を指標として-, 全日本鍼灸学会, 2018
- 24) 沼田まり子, 高木朋子, 柴田泰治, 向 ありさ, チュロウンバト・オユンチメグ, 谷口博志, 水出 靖, 古賀義久, 安野富美子, 坂井友実: 臀部痛を主訴に来療後血管性間欠跛行を呈した鍼治療の1症例-ASOを推察し医療機関で確定診断された症例-, 全日本鍼灸学会, 2018
- 25) 山崎さつき, 安野富美子, 古賀義久, 坂井友実, 芳賀道子: 子宮内膜増殖症に対する鍼灸治療の1症例-クラス3からクラス1へ-, 全日本鍼灸学会, 2018

VI. 課題と今後の展望

1. 地域医療としての役割

地域医療としての鍼灸センターの役割は地域住民の疾病・症状の改善, 健康の保持増進に貢献することであるが, 来院患者数の動向は, その成果を示すひとつの指標となる。鍼灸センターの来院患者数は開設以来, 年々増加していることから, 治療手段の一つとして地域住民に受け入れられていると考える。増加の内訳をみると初診の患者数は, 毎年ほぼ一定しているが, 再診の患者が増加している。このことは, 継続して治療を希望する患者が多いことを意味している。また, 来院のきっかけが家族や知人からの紹介が最も多い (58%) ことは当センターが地域住民から高い評価を受け信頼されているものと考ええる。

しかし, 地域医療貢献を考えたとき, 疾病や症状改善のための診療行為のみではなく, 予防医学的な観点からの貢献も考えておく必要がある。これまで地域で開催されるイベント (古石場文化センター祭り, 豊洲フェスタ, サイエンスアゴラなど) に参加し, 鍼灸の紹介や健康相談コーナーを設け普及に努めてきた。これらのイベントへの参加は, 今後も継続していくことは当然のことではあるが, さらに鍼灸の特徴についてより深く理解してもらうための講演や, セルフケアとして活用してもらうための公開市民講座などを設ける必要がある。

2. 臨床教育の場としての役割

鍼灸センター実習を通して学部学生が卒業後に研修を希望する者が増えてきていることは, 鍼灸臨床にさらに興味関心を深めたことが考えられる。また, 既卒者が就業の傍ら研修を希望するケースもある。さらには, 実習で担当した症例をまとめ, 全日本鍼灸学会で学生ポスター発表を行い, 優秀賞を受賞したことなどは鍼灸センターでの臨床教育の成果ともいえよう。

しかし, 鍼灸センター実習は到達目標を設けているものの, その成果については十分に検討されていない。他の鍼灸系大学で行われている臨床実習の内容や到達目標などと比較検討する必要がある。また, 臨床実習終了時

での成績評価は行っているが、中長期的な視点から評価を行っていないため、この観点からの調査も必要であろう。例えとして進路先、あるいは就業先での状況（勤務先での職位、業団での役職など）である。

一方、研修制度も7年目になり在籍者総数が年々増加しているが、この増加は継続を希望していることによる。このことは一人前の臨床家になるのに単年度では難しいことを意味しているともいえる。2年目以降在籍の研修生は自立して診察から治療まで行えること、専門領域（得意分野）の確立や担当した症例をまとめて学会発表を行える、などを目標としているが、これらの目標の達成が一人前の鍼灸師への道と考える。また、研修生から本学大学院へ進む者もあり（過去4名）、学会発表の数も増えていることから鍼灸センターでの研修による成果と考える。

しかしながら、継続希望の研修生が多いということは、見方を変えればまだ目標に達していない者が多いともいえる。この点に関しては、研修日を一年目は週2日とし、2年目以降は1日でも可としていることなど、研修日数に問題があるのかもしれない。また、教員による勉強会（1年目研修生対象）が4月・5月は毎週行っているが、その後は月1回と少ないこと、全研修生を対象とした勉強会が設けられていないことなどの要因も考えられる。研修制度についても今後見直していく必要があるだろう。2019年1月に行う第1回の研修生症例報告会は、2年目以降の研修生を対象とした発表会であるが、研修の成果をみるうえで参考になると思われる。

3. 臨床研究の場としての役割

鍼灸センター関連の論文報告、学会発表数はそれぞれ6編と25演題であった。論文数、演題数についての評価はともかく、問題はその内容である。研究論文は6編あ

り、その内訳は、原著が1編、報告が5編であった。原著の1編と報告の1編は鍼灸の安全性に関する調査研究であり、報告の3編は1症例報告、残り1編は鍼灸センターの概要であった。学会発表は25演題あり、その内訳は、附属鍼灸センターの実態報告が5演題、鍼灸の安全性に関する調査研究が1演題、症例報告が19演題であった。原書論文は安全性の研究のみで、学会発表は症例報告がほとんどで、症例集積による鍼灸の有効性や有用性を検討した研究がない。後ろ向きの症例集積研究をはじめとして、より質の高い前向きのコホート研究やランダム化比較試験（RCT：Randomized Controlled Trial）がないことである。RCTの実現には専門医とのタイアップ、研究資金、マンパワーなど多くのハードルを越えなければならない。しかしながら、研究資金を確保するとともに専門の医療機関との連携を図り質の高い臨床研究の実現に向けて取り組んでいく必要があるだろう。鍼灸センターは疾患や症状を対象とした診療施設であり、研究施設でもあることから、症例集積に主眼を置いた研究を進めていくことが今後の課題である。

Ⅶ. おわりに

東京有明医療大学附属鍼灸センターが、さらに地域住民の方々の疾病の改善、健康の維持増進に役立つとともに、親しまれ、鍼灸医療の素晴らしさを実感していただき、鍼灸に関する正しい認識を持って頂くように努めたい。また、鍼灸センターは教育機関でもあり研究機関でもあることから、より優れた鍼灸師を育成することを目指していくとともに、今後は、関連の専門医療機関と積極的に連携し、質の高い臨床研究に取り組んでいく所存である。